

平成21年12月の解説（府県天気予報）

【12月の天候状況】

上旬は天気が数日の周期で変わり、3日と5日は低気圧の影響でほぼ全国的に天気が崩れました。中旬のはじめは日本海と本州の南を進んだ低気圧により、東・西日本の太平洋側では局地的な大雨になりました。その後、寒気が日本付近に流れ込んで冬型の気圧配置となり、東北地方の日本海側と北陸地方を中心に大雪となりました。下旬のはじめも冬型の気圧配置が続きましたが、その後は天気が周期的に変わりました。29日は低気圧の通過にともない北海道の太平洋側で記録的な大雪になりました。31日は強い冬型の気圧配置となり、各地で大雪や強風の被害が発生しました。

月を通しての日照時間は西日本で平年より少なくなりました。降水量は北日本と東日本の太平洋側で平年よりかなり多くなりました。気温は東日本で平年より高くなりました。

【12月の検証結果】

17時発表の天気予報で「降水の有無」の全国平均の適中率は明日予報が84%で例年（注）より1ポイント高く、明後日予報が82%で例年より2ポイント高くなりました。地方ごとの適中率は、明日予報は北日本と関東・甲信、北陸、沖縄地方では例年より4から8ポイント高くなりました。西日本では例年より低くなり、特に九州北部地方では10ポイント低くなりました。明後日予報は北日本と東日本では例年より4から7ポイント高くなり、沖縄地方では12ポイント高くなりました。四国地方と九州北部地方では10ポイントと14ポイントそれぞれ低くなりました。明日の最高気温の予報誤差は、北日本と東日本を中心に例年より0.2から0.4小さく、全国平均は0.2小さい1.3でした。最低気温の予報誤差も北日本と東日本を中心に例年より0.1から0.3小さく、全国平均は0.1小さい1.5でした。

（注）例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【12月の天気予報から】

12月11日は、前線を伴った低気圧が夜遅くに関東の南岸を通過したため、関東地方では明け方から雨が降りました。（図1）

前日の10日17時に発表した東京地方の11日の天気予報は、「北の風が後にやや強く 雨で明け方まで曇り」とし、最高気温を10と発表しました。

これは、前線を伴った低気圧が関東の南岸を通過するため朝から雨が降ると考えたことと、関東地方の広い範囲に内陸部から吹く冷たい北風と、

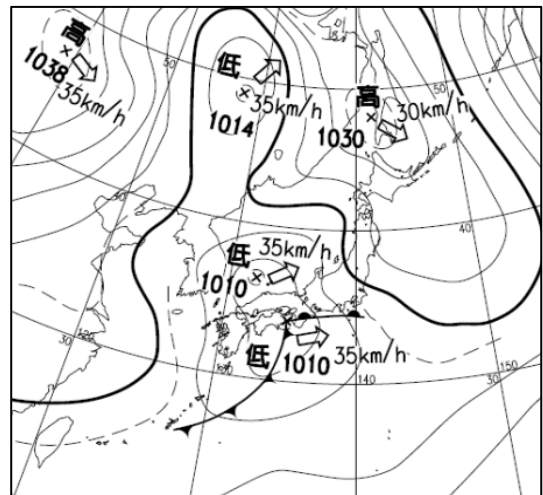


図1 平成21年12月11日12時の地上天気図

房総半島から茨城県の沿岸部に低気圧に向かって回り込むように吹く暖かい東寄りの風で局地的な前線が形成されるため、低気圧が接近しても東京地方には内陸部からの冷たい北風が吹き続けると考えたからで、それにあわせて最高気温を数値予報の予想よりも約2度下げて10度と予報しました。

実際の東京地方の天気は、ほぼ予報どおりに明け方から雨が降り始め夜遅くまで続きましたが、気温は予想したほど上がり、東京の大手町の日中の気温は8度前後で推移しました。11日18時の東京地方とその周辺のアメダスの風と気温分布(図2)を見ると、北寄りの風が吹いているところは気温が10度以下で、海上からの東寄りの風が吹いているところは気温が10度以上(緑に塗られた部分)になっており、赤点線で示したような局地的な前線が形成されています。

10日17時の天気予報を発表した段階で、数値予報では明瞭に予想していなかった局地的な前線を予報官が適切に予想できたため、東京地方の風の予報を「北の風」と予報し、最高気温の予想も数値予報による予想を改善することができました。

このように、関東地方では低気圧が沿岸を通過する際に、内陸部からの冷たい北風と海上からの暖かい東寄り風とで局地的な前線が形成されることがあります。局地的な前線の位置を的確に予報することも気温の予報には重要な要素の一つです。

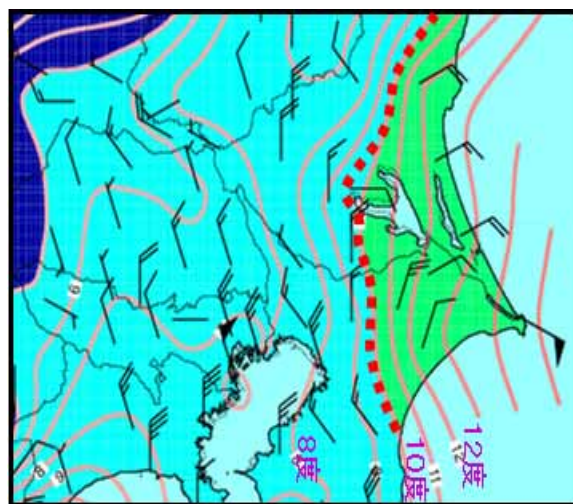


図2 平成21年12月11日18時のアメダスの風と気温(緑部分:10以上)

【2月の天気予報の利用にあたって】

2月は1月と並んで1年で最も気温が低い月ですが、低気圧が発達しながら日本海から北日本に進むと、強い南よりの風が吹いて気温が急激に上がり、多雪地帯ではそれまでに降り積もった雪によりなだれが発生し易くなります。一方、低気圧の通過後は強い北よりの風が吹いて気温が急速に下がります。このように2月に低気圧が発達しながら日本海から北日本を通過する際には、大荒れの天気とともに、なだれや急激な気温の変化等に注意が必要です。各地の気象台が発表する気象情報に気をつけて下さい。

【お知らせ】

「月の天気予報から」として毎月定期的に掲載してきました事例解説は、今後は特異な事例があった場合などに掲載します。